

小学校高学年における情報モラル教育の具体的な実践

－体験を通して学ぶ情報モラル－

大平慎也（川崎市立はるひ野小学校）・和田俊雄（川崎市総合教育センター）

概要：川崎市では小学5年生以上の自分専用の携帯電話・スマートフォンの所有率が70%を超え、児童にとってインターネット・スマートフォン・タブレットは、生活でも学習でも身近なものになっている。それにより情報発信が手軽にできるようになる反面、これまでは中学校で多かったトラブルが、小学校でも見られるようになってきた。本研究では小学校高学年（5年生）からSNSやメールをお互いが気持ちよく使っていくために必要な判断力の育成を目指した。SNSやメールを体験している児童と未体験の児童双方が同じ立場で話ができるよう擬似グループトークやSKYMENUのメール機能を使い実践を進めた。

キーワード：情報モラル, SNS, 小学校高学年, 体験学習, 授業実践

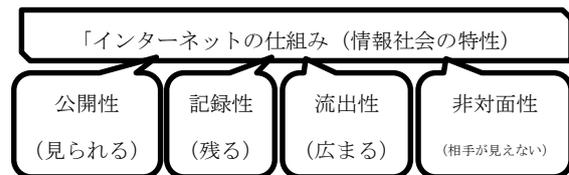
1 はじめに

今日、子どもたちを取り巻く情報に関わる環境は日々変化し、コンピューターやタブレット端末、スマートフォン、携帯型ゲーム機等を日常的に使う子どもたちが増えてきている。本市で行った『川崎市学習状況調査』（平成29年）によると、小学5年生での自分専用の携帯電話・スマートフォンの所有率は74.9%となっており、年々増加している傾向にある。このような状況は、情報発信が手軽にできるようになった反面、様々なトラブルの温床にもなっていると考える。文部科学省が行った『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』（平成28年）によると「パソコンや携帯電話等で誹謗・中傷や嫌なことをされる」の項目の割合が年々増加していることが示されている。本校でもSNSの発信がもとで、トラブルに発展したケースがあり、より情報モラル教育の推進が必要であると感じる。

情報モラル教育の必要性について、学習指導要領（平成29年3月）には、児童・生徒の発達段階を考慮し、情報モラルを含む情報活用能力の学習の基盤となる資質・能力を育成できるよう、各教科等の特性を生かし、教科横断的な視

点から教育課程の編成を図るものとし、児童・生徒の発達段階に応じて、情報モラルに関する指導を充実することが求められている。

川崎市の情報モラル教育では情報社会における判断力の育成を大切にしている。判断力の育成のために、「日常モラルを育むこと」と「インターネットの仕組み（情報社会の特性）（※以下ネット特性）を理解させることの2つの指導項目を繰り返し指導することとしている。（図1）



（図1）インターネットの仕組み

しかし、小学校高学年においては自分専用の携帯電話・スマートフォンの所有率は高いものの、まだSNS等の使用経験には差が見られる。そのため、ネット特性を理解する場面では、SNS等を未使用の児童が実感を伴いながら学習することが難しかった。

SNS等を未使用の児童が実感を伴って学習を進められるように、本研究では、公立小学校であるX小学校の5年生を対象に擬似グループトークやSKYMENUのメール機能の体験を基に

「なぜトラブルになるのか」「よりよく安全に使うためにはどうしたらよいか」を疑似体験し考えていく実践を行った。また、ネット特性（公開性、流出性、記録性、非対面性）は児童にとっては難しい言葉でありイメージしにくいと考え、学習後にも汎用的に使えるように覚えやすいキーワードを作り、よりイメージをもつことができるように工夫した。

2 実践の方法

（1）実践対象および実施時期

川崎市立X小学校第5学年（40名）を対象に平成30年6月から日常的な指導と授業実践を行った。

（2）実践の概要

（表1）実践内容とねらい

	内容	ねらい
①	事前調査（アンケート）	実態把握
②	疑似グループトーク体験	ネット特性の理解 記録性 非対面性
③	事例動画を使った授業	ネット特性の理解 記録性 流出性 非対面性 日常モラル
④	SKYMENUでのメール体験	ネット特性の理解 非対面性 流出性

（3）検討方法

表1②③④の授業と日常の指導を実施し、授業中の児童の言動やワークシートの記述から実体験を基にした授業の効果について検討する。

3 結果

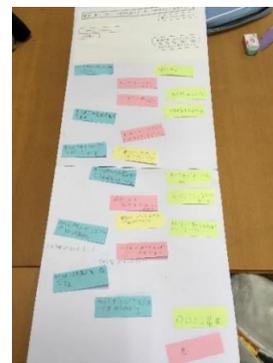
（1）児童実態（事前調査より）

事前の調査では、「自分専用の携帯電話・スマートフォンをもっている」の問いに対して「はい」と答えた児童は約70%だった。また、「これからSNSやグループトークを使用してみたい」という児童は90%を超えていた。「メールやSNS等で情報発信の経験がある」と答えた児童は約

70%だったが、「携帯・スマートフォンを介したトラブルに巻き込まれたことがある」と答えた児童は1人であった。具体的には、グループトークで同じスタンプを繰り返し送ったことがトラブルの原因だった。

（2）疑似グループトークの体験

4人グループを作り、画用紙にメッセージを書いた付箋を貼っていきグループ内でメッセージのやりとりをした。（図2）活動のねらいは、グループトークやメールなどの文字情報の発信を体験していない児童にも体験を通してグループトークの利便性や仕組みを理解することとした。



（図2）実際に行ったグループトークの画用紙

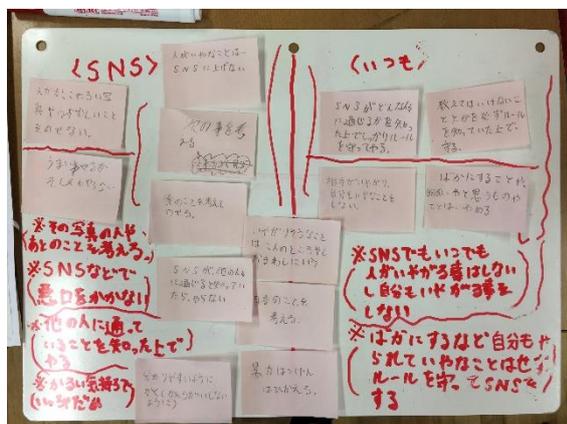
「自然教室に持って行くものを準備したか」という児童が楽しみにしている行事に関する話題でグループトークを始めた。活動が始まると多くの児童が黙々とメッセージを書きやりとりを行っていた。活動後の児童の感想を分析すると、「楽しく話げできた。」等の肯定的な意見が約90%だった。また、「グループのみんなに伝える事ができて便利。」「普段なかなか話せないことを文字なら話すことができた。」というグループトークの利便性や仕組みに関する意見もあり、それらの意見を全体で共通理解をした。また、「話が別の方向にずれていった。」や「話のスピードについて行くことができなかった。」といった否定的な意見も挙げられた。クラス全員が体験的な学習をすることで、児童自身が気づいた利便性や使いにくさについて多面的に理解する姿が見られた。

（3）事例動画を使った授業実践

擬似グループトークで経験したグループトークの利便性や仕組みなどの既習をもとに、グループトークによるいじめを題材とした情報モラルの授業を行った。映像教材は広島県教科用図書販売株式会社「事例で学ぶNetモラル2018」の中の「そんなつもりじゃなかったのに」を使用した。授業のねらいは、SNSの利便性と危険性を知り、より適切なコミュニケーションのとり方について考えると設定した。

事例場面を読み取る活動では、多くの児童から文字情報による気持ちのすれちがい（非対面性）について指摘があった。しかし、記録性や流出性について問題視する児童は少なかったため、以前行ったグループトークを想起させイメージをもてるようにした。

「SNSはトラブルが多いから使わなくていいか」という問いに対してほとんどの児童が使っていきたいと答えた。そこで「どうすればお互いが気持ちよくSNSが使えるだろう。」という学習問題を設定し、「日常的なこと」、「SNSだからこそ」、「どちらにも言えること」の3つの視点で考えた。(図3) グループで話し合った際には、「人の悪口を書かない」「自分がされて嫌なことはしない」など相手の心情を考えた意見(日常モラルの視点)が多く挙げられた。また、「写真を勝手にSNS上に載せない」という意見もあった。なぜ勝手に載せてはいけないのかという理由を事例動画で取り上げられていたネット特性(記録性・流出性)とつなげて考えることができている記述が見られた。



(図3) グループで話し合った内容の一部

一方で、ネット特性を表す言葉(公開性、流出性、記録性、非対面性)は、児童にとって理解したり、イメージしたりすることが難しい言葉である。そこで、児童でも理解しやすい単語を選びキーワード化した。4つのネット特性(のこる・ひろまる・みせる・つたわりにくい)の頭文字を取って、インターネット「のひみつ」という分かりやすく覚えやすい合言葉にして提示した。(図4) キーワード化することで言葉の定着だけではなく、他の事例でも活用したり、考えたりしやすい共通の言葉になると考えた。

記録性	流出性	公開性	非対面性
「のこる」	「ひろまる」	「みせる」	「つたわりにくい」

(図4) インターネットのひみつ

(4) SKYMENUのスマートフォン機能を使ったメール体験

ネット特性を体験的に理解するために、教育用ソフト「SKYMENU」上に展開される擬似的な自分専用のスマートフォン(パソコン)を使ったメール体験を行った。(図5) 始めは友達へのあいさつや好きな食べ物などのメッセージを送信し合い、メールの仕組みや利便性について体験を通して理解した。その後、教員のパソコンから送られてきたメールに対してどのように返信をするか学習した。『Aちゃんってかわいくない』というメールに対しては、「そんな悪口いっちゃダメだよ。」「私もかわいいと思う。」「どっちの意味?」といった返信があった。このメールの内容や問題点について話し合いを進める中で、ネット特性(非対面性)を根拠とした意見が多く挙げられた。

また、『無料でお笑い動画が見られます。下のURLを押して今すぐチェック』に対しては、17人の児童がURLをクリックしてしまい『ご利用ありがとうございます。29800円お支払いください。』という画面が表示され驚いていた。興味本位でURLをクリックしてしまった児童が多く、知らない人から送られてきたメール(非

対面性)の怖さや自分の情報が知らない人に知られてしまう(流出性)怖さを実感していた。その後の話し合いでは、そういったメールが来た場合はどうすればよかったのか、URLをクリックしてしまったときの行動について考えを深める場面が見られた。



(図5) メール体験の様子

4 考察

事前調査の結果や児童への聞き取りから SNS 等の使用実績は、児童ごとに異なっている。そのため、ネット特性の理解には個人差が大きく、体験や事例を積み重ねていくことで少しずつネット特性への理解について深まっていくことが本研究の授業実践を通してわかった。

SNS 等を未使用の児童の授業ごとの振り返りには、「SNS を使うときには相手の顔が見られないからいつもより気をつけてメッセージを送らないといけない。」「メッセージを送るときには相手はどう感じるかを考えて送らないと相手を傷つけてしまうことがある。」「相手がどんな気持ちで送ってきたかわかりづらい。」など、疑似体験的な学習を通して感じた非対面性に関する感想が多かった。実践では、グループトークやメール(非対面性)から起こる言葉や気持ちの「すれ違い」の事例を扱ったことが要因だと考えられる。この「すれ違い」は SNS 等に限らず日常生活においても起こり得ることである。インターネット、SNS 上だけのことではなく普段の日常生活とのつながりにも授業を通して気づかせていくことが必要である。

本研究の実践後、クラスで共同制作をした動

画をインターネットに載せて広めたらいいのではということが話題になった。その時の話し合いの中で、ネット特性(流出性・記録性・非対面性)を根拠に話が進み『インターネットのひみつ』という合い言葉を使って広めることの危険性を訴える児童がいた。『インターネットのひみつ』という全員がイメージしやすいキーワードを提示したことで、別の場面でも学習した内容を活用することができたと思われる。ネット特性を体験的に学習することとともに、キーワード化することで SNS 等を使用する際の一つの判断基準として効果的であることが確認できた。

5 今後の課題

今後は、体験的な学習によりネット特性の知識だけ増やすだけではなく、判断力育成には欠かせない「日常的なモラル」についても道徳や他教科と連携をとりながら育てていくことが重要であると感じた。「ネット特性」と「日常モラル」知識と心情をバランスよく育み、情報社会における判断力の育成を目指していきたい。

参考文献

- 川崎市総合教育センター情報視聴覚センター(2018) 5分でわかる情報教育Q&A 第11版
広島県教科用図書販売株式会社(2018) 事例で学ぶ Netモラル
堀田龍也, 西田光昭(2018) だれもが実践できるネットモラル・セキュリティ
文部科学省(2018)「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/02/1401595.htm
文部科学省(2017) 小学校学習指導要領解説
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387014.htm